

昭和二十四年八月五日 コムソモール地区第七

分所建築及び貨車積込作業

昭和二十四年十月二十日 コムソモール第一第

二第三分所雑役 以上

昭和二十四年十二月八日 帰還のため 信濃丸
にて約千人帰還す

回想

栃木県 黒川 護

大正十三（一九二四）年八月二十九日 栃木県
下都賀郡大谷村（小山市）武井に十人兄弟の長男
として出生、家業は農業。

昭和十六（一九四一）年十二月、繰上げ卒業に
て茨城県立結城農業学校卒業。農業に従事。

昭和十九年十一月二十日、北支派遣陣第二九九
三部隊福富隊要員として宇都宮本部三十六部隊に
入隊。（六十三師団六十六旅団独立歩兵七十八大
隊機関銃中隊）一週間、列車にて現地に向う。中
国河北省保定駅下車、西方約三十キロの高陽県に
て一期の検閲。

出征当時の家族構成。私の上に姉が一人いたが、
前年の十八年に中国の華北交通に勤務していた夫
と結婚、すぐ下の弟はこの年栃木商業卒業と同時に
に軍属として既に南方へ出征していた。ここ一年

半ぐらいの間に上から三人の姉弟が家を離れた。でも当時の国民感情として、国家危急存亡の状に当り、当然の行為として理解していた。

家には父母を初め祖父母、女学校に通学中の妹を先頭に四男三女の兄弟達が残された。

昭和二十年三月、甲種幹部候補生。

同年四月重機関銃幹部候補生の旅団集合教育（於望都）

昭和二十年六月、六十三師団（陣部隊）満州に移動、関東軍の管下となる。

同月関東軍石頭予備士官学校に十三期生として入校。

八月一日軍曹の階級に進む。

八月九日午後三時、非常召集にて全員営庭に集合。学校長（部隊長）より非常事態の宣言としてソ連軍が本日零時を期して東部国境より満州に侵攻して来たことを告げられ、今後我々のとるべき行動、心構え等について烈々かつ悲壮なる訓示がなされ、直に各人の環境の整理と一部を除いて室

内待機が言い渡された。

この間、今までの教育隊を直に実戦に対応できる様に編成替えされた。全教育隊を二カ連隊に分け、一方を荒木（荒木貞夫大将の長男）連隊、一方を小松連隊とした。

なお、各中隊長は大隊長、各区隊長は中隊長となり、小隊長、分隊長、一般兵まで全部軍曹の階級章を付けた戦闘部隊が編成された。

八月十日夜、全員営庭に整列、荒木連隊は掖河、磨刀石方面出陣のため、出陣式を行う。

行く者、送る者共に決死奮闘を誓い合う。

八月十一日午後、小松連隊出陣式。

同日夜半出陣命令、東京城方面に向う。

私は小松連隊に属し東京城方面に向って出発したが、ここ磨刀石方面で敵の機甲軍団を迎え撃ち、二日間わたってこれを釘付けにし、ほとんどが全滅に近い戦死者を出しながらも最後まで闘った荒木連隊の奮闘を書かなければならない。即ちこれによって前線から夜を日に継いで逃れて来た開

拓団の老幼婦女子を始め、多くの一般地方人の退避のため、何千人あるいは何万人の命を救ったことにつながったことを信ずると共に、この地で散った幹部候補生七百二十一人のご冥福を祈ること切である。

一方、東京城方面に向った我々は、十二日払暁石頭東南方の一文字山に到着、直に陣地構築に入り二人用の蛸壺と銃座を掘り、やがて来るであろう敵の戦車軍団を迎え撃つため、懸命の作業に入った。

しかし肝心の円匙は三人に一丁ぐらいしか渡っていない。やむなく鉄帽をとって懸命に掘ったが、中々進行しない。ふと気が付くと弾丸の破裂音のような音が聞こえて来て、それがだんだんと激しくなってきた。さては！と私は直感した。……予想より早く敵は接近し、この一文字山に我が軍の布陣を知り撃ってきたものと察知した。そして時ならずしてあの稜線に敵戦車の砲頭が現われるのではないか等、考えたら、もう夢中になって全力

を鉄帽に集中した。と同時に――、俺は今日ここで戦死するであろうと直感。ならばよし……祖国安泰のため、弱冠二十歳の今までの命は今日のためのものだったんだ。……最後まで頑張つて敵の戦車を食い止めて見せる。この場に及んで不思議と生への執着は無かった。でもそれと同時に故郷の親兄弟のことが浮かんで来た。

砲弾の炸裂音は次第に激しくなり、榴散弾の破片らしきものが至近まで落下して来たが、ここで不思議なことが起ったのである。

「現在地を撤収して道路上に集合」。中隊長の命令である。不思議に思ったが命令とあらば仕方がない、蛸壺掘りをやめて山を降り、道路上に出ると道は南下して来る避難民でいっぱいだった。

乳呑児を背中におんぶして幼児の手を引きながら一心に歩く母親の姿、髪の毛を乱したまま、半ば放心状態の様になって歩いている老女、いずれも頼みとする夫は既に兵役にとられ、今はただ、全力をあげて安全地帯であるだろう南方に向つて

歩き続けていた。そのうち先ほどの爆撃を受け、青木中尉外候補生数人の戦死傷者を出してしまった。

東京城で大休止をし、食糧を十分確保して再び出発である。時折、雨に打たれながらもただ黙々と歩いた。この間何人かの落伍者が出たが、お互いに励まし合いながら一路敦化方面に向って行軍。

八月十八日ごろ、連隊本部はソ連の軍使と接触があつたらしく、停戦した旨伝えられる。最初、我々は停戦協定が成立した旨聞いていたが、翌十九日無条件降伏を知り、お互い切齒扼腕、そして皆泣いた。声を上げて泣いた。部隊長より軽挙妄動は厳に慎むよう命令が出た。

八月二十日敦化郊外の東沙河沿飛行場に到着。終戦の詔書、全員に伝達される。

八月二十一日、自らの手で武装解除。以降同地において天幕生活。

十月、千人単位の大隊が編成され二五四大隊と命名、大隊長に奈良中尉が任命される。

この中に幹部候補生は九百人、外の部隊より百人で編成された。この時、予備士官学校時代の区隊長以上の将校は全部この編成から外され、どこかに連れ去られた。

この行軍は全員を祖国日本へ帰すと言うソ連のふれ込みだったので、みんなもそれを信じ、誰しも持てるだけの物を身に付けて歩いたので決して楽な行軍ではなかった。また行軍中、時計や万年筆、鉛筆等はほとんどロスケの警戒兵に取り上げられた。なお、道路の両側には半ば腐れかかった人や馬の死体が至る所で散見された。

掖河の駅を過ぎた辺りだったと思う。道路の両側に掘られた蛸壺がそのまま並んでいたが、そこには何人かの戦死者の死骸が置き去りになっている。ほとんどの人は上衣を着けていない。恐らく満人に剥ぎ取られたのであろう、無残極まりない姿である。上衣を着ていれはすぐに判別がついたのだが、どうも我々の同期生ではないか？ と思うようになってきた。それはほとんどの人が我々

が教育中に使っていた白い体操用のバンドを締め
ていたからだ。そしてその内、表紙に「修養録」
と書かれたノートが落ちていたので、私はそれを
拾おうとして少し隊列を離れた。その途端、付添
いの警備兵が銃をこちらに向けながら何か大声で
どなりながら近付いて来たので元に戻らざるを得
なかったが、この修養録こそ我々が教育中、一日
も欠かさずその日その日行ったこと、区隊長の訓
示の内容や感想等を細々と書きついできたノート
だったのです。

もしかやと思ったことがこれですべて分かったわ
けだが、このときほど戦争の残酷さ、悲惨さ、ま
してや戦いに敗れた者のみじめさ、悲しさを感じ
た時はありません。(後日聞いたところによると
ソ連側との交渉の結果、これらの遺体は我が方の
使役によって丁重に葬られた。)

目的地まで歩かされた我々は、ここで約二十日
間、日本に帰るための環境の整理という事で、毎
日体にびつしりと付いている虱とりや、種々の使

役に駆りだされた。

もちろん帰還列車と言うその内装工事は全部自
分達の手で完成した。二段装置の寝台、ドラム缶
を取り付けた急造のストープ、一番端に四角の樋
を外に斜めに出してトイレの排出口として完成。

いつしか十月も過ぎて東満は初冬である。さす
がに気温も下がって、時折粉雪が降り出した。

当時の資料を見ると国境通過が十一月十日にな
っているから、恐らくその二〜三日前には乗車完
了して出発準備に余念がなかったであろう。そし
て誰もが命長らえて祖国に帰る喜びに浸っていた。
が、一方言い知れぬ不可解な心情にさいなまれて
いたのは自分一人ではなかったであろう。すなわ
ち三カ月前の我々は共に一死以って君国に報いる
覚悟で、あらゆる困難をも排除し祖国日本の必勝
を信じながら、共に戦ったはずなのに、今、現実
の姿はどうであろうか？ 君達は戦場で予想もし
なかつた敵の大機甲軍団と戦い、祖国の安泰を信
じながら、故郷の両親兄弟達の面影を心に描きな

がらこの地に果てた。それに対して俺達は何だ——。ろくな傷も受けずに、命長らえて故郷に帰ると言うのか——。それではあまりの不公平だ——。

こんなことを神や仏は許すであろうか？

私は列車の中で自問自答しながら良心の呵責に責められながらもいつしか眠りに落ちた。

翌朝騒々しいみんなの声に目を覚ました。汽車が西を向いて走っていると言うのだ……。

やっぱりシベリア行きか……。

ロスケの奴、騙しやがって……。

罵詈雑言を並べて地団駄踏んだがもうどうにもならない。ただゴトンゴトンと言うレールの音が聞こえるだけだった。私は空気の取入口として作られた小窓から外を見たが、ここがどこであるかはさっぱり分からなかったが、地面はすべて真っ白い雪で覆われていた。

以後私達は次第に口数が少なくなった。

ある日、大きな街の引込線らしき所に停車し、車外に出ることを許された。水の補給のためだっ

たと思う。直に下車、先を競う様に水道の蛇口や井戸を探したが発見出来ず、止む無く私達は堀の水を破って飯盒と水筒に水を入れて車内に戻り、早速炊事に取り掛かったのであるが、ストーブに乗せてしばらくすると何か変な臭いが出した。最初それを気にも止めずにいたが、焚きあがって蓋を取って見ると、先ほどからの臭いが一気に鼻に飛び込んだ。何のこと無い、先刻堀からくんで来た水は、この街の下水だったのです。

一同は出来上がったこのどぶ臭い飯をいかにすべきか迷ったが、車は既に外から鍵がかけられおり、再度の水探しは不可能だ。少し冷めるのを待つて少しずつ食べたが、誰も腹をこわした者もなく、一同胸を撫で下ろした。

入ソ早々の笑うに笑えない一場面でした。(後で分かったが、この街はシベリア極東最大の街ハバロフスクでした)

その後列車は時折引込線の様なところに停まりながら走り続けた。一体どこをどう走っているの

か皆目分らない。

日本へ帰ると言って掖河を発つてからもはや一週間余、すべての希望が裏切られて、今も列車は北へ北へと走っている。シベリアの大地は余すところなく白一色の雪野原。

今後我々ほどの様になるのであろうか？ 色々話し合ったが、もちろん結論など出る筈もない。

暗い予測の中に前途を案じながらも半ばあきらめに似た……「もう、どうにでもなれ！」……と言うような感情に支配されていた。

昨夜はこの引込線で一夜を明かした。翌朝「装具を全部持って下車！」の号令が逐次伝えられてきた。外を見ると日本人らしき人が十人ぐらいして何か動いている。

おーいみんなどこから来たか――。

掖河から来たことを誰か答えると彼らも掖河から来たが、ここへ来てから一カ月になる。このことだった。

警備兵はここが東京だから早く降りろ――。(ゲ

エスト、トーキョウ、ダバイ、ヴィストラ、ヴィストラ)と大声で何回も怒鳴っている。

外は経験したこともない物凄い寒さだー。

おそらく零下二〇度ぐらいはあったであろう。

帰国だと言うので誰しもが夏服に編上げ靴のいでたち。普通、外套と毛布一枚ぐらいは各自が持っていたが、到底この寒さには太刀打ちできない。ただ、足踏みをしながら寒さに耐えているだけだ。間もなく四方をシートで覆われたトラックが来て、あたかも家畜のごとく我々をこれに追い上げて外側からシートを密閉した。

我々は隣の人と密着しながら、ほとんどクツシヨンの無い大型トラックの振動と寒さに耐えた。

朝出発してから丸一日中走り続けて、目的地に着いたのはすっかり暗くなつてからだだった。我々はこので最初の一夜を明かすことになる。指令された宿舎は真新しい天幕作りの小屋だった。いくらかストーブを炊いても室温は中々上らなかつた。足と頭を交互にして隣の人との空間を出来るだけ

なくして寝た。

もちろん外套は着たまま、帽子はかぶったままの姿だった。

翌朝全員整列し、ロスケの点呼が終わってから奈良大隊長の訓示があった。

「我々は考えたくもなかったことが現実となった今、決して早まったことなどせず、くれぐれも体を大事にして、日本に帰ることが出来る様、頑張ってください……」

概略以上の様なことを話されたと思う。

技術系出身の奈良中尉は何か我々に親しみ深い、おとな向きの将校であった。(あれから六十一年を過ぎた今でも悲壮な面持ちで語った彼の面影がはつきりと浮かんで来る。)

初仕事

翌日から早速分隊ごとに分けられて作業に出勤である。初め与えられた仕事は自分達の住む宿舎の建設であった。

収容所として第一番目に到着したここは恐らく

第二次大戦前まではソ連の囚人の収容所であったのであろう。建物の土台を並べただけでそのまま放置されているものから、屋根無し的小屋まで雑多であった。これを今度新入りとなった我々日本人捕虜によってその後継ぎをさせようと言うのであろう。

この収容所の周りは木はほとんど無く、平らな平地となっていたが少し離れた所からは直径三十センチ以上もあるかと思われる内地の樅の木に似た大木が点在し、その周りには白樺の木が密生し、地面には自然に倒れて既に半ば朽ち果てた大木が横たわっていた。

この地一帯はいわゆるシベリアの大原始林だったのです。

もちろん後日逐次分かってきたのだが、ソ連はこの原始林を開発して第二シベリア鉄道を日本人捕虜(実際は抑留者)の手によって完成させようとしたのです。

収容所内には電灯もなくランプもありません。

もちろん洗面所も浴場ありません。

私達は作業の帰りに白樺の皮や松脂を取って来て灯の代用としたので、皆の顔は次第に煤けてきて目だけが光っている状態でした。

入浴

二週間ぐらいたったところ、私達のグループに舎前に整列の号令がかかり、「これから入浴のため、隣の収容所まで歩く」と言うことなので、一同は内地の風呂を想定して寒さの中を我慢しながら、四キロぐらいの道を歩いた。いよいよ入浴準備、これは今まで着ていたすべての衣類を一括して針金でくくり、滅菌室に吊るし、一定時間高い温度で主に下着についている虱を駆除するためのものだが……。さていよいよ入浴となり、浴室に入ると、想定していた様な場所はどこにも無い。ただストーブだけはかなり気合をかけて燃えているので室内はまずまずの暖かさだ。二十センチ×三十センチぐらいの箱形の桶に飯盒二杯ぐらいのお湯が渡され、これで全身を洗うこと、更に上がり湯

として、また同量のお湯を渡す旨、浴場掛よりの指導があった。しばらくの間体を拭いたことのないので中々汚れが落ちない。

指先で皮膚をこすると垢がこより状になって落ち始める。ストーブにあたりながらこれを何回か繰り返し、最後に上がり湯をもらってその垢を洗い落とすのだが、もらった湯が無くなればそれで終り。あとは時間が来るまでこの部屋で待ち、脱衣時に預けた滅菌消毒済みの衣類を着て、入浴行為の一切は終るわけだが、このときが一番人間らしい快感を味わうことが出来た。

つまり久しぶりに幾分なりとも垢を落とし、虱のいないさっぱりと乾いた着物を着られたからに他ならない。(でも十日と経たないうちに次の虱が湧いて来るのだが。)

移動

ある日突然、大隊副官の三島曹長が来て、「今から読み上げる人は装具を持って直に舎前に集合——」と言ってソ連収容所長の命令を伝えに来た。

移動らしいが詳細は分からないと言う。この時私のグループからは五人ぐらいだったと思うが総員で百人ぐらいの人が集合、間もなくやって来た幌付きの自動車に乗せられ、行先も告げられずに北の方を向いて出発した。

教育隊出発以来、いつも一緒の行動をし、気心もお互いに分かり合っていた戦友と別れることになり一抹の寂しさを感じたが、お互いに前途を励まし合って別れた。

第二回目に入った収容所は二〇四収容所と言って既に大勢の先客が居て、大隊長は内山中尉であった。

この大隊は国境に近い間島に居た元独歩二十五大隊の人達で、部隊ぐるみでこの収容所に入ったとのことだった。当時私達の小隊長をしていた愛媛県出身の越知候補生の原隊とのことで、多くの知人が居たのでその事が分かった次第。

この収容所の仕事はほぼ前と同じようだったが、ここで私にとって忘れ得ぬことがあったので

記しておこう。

ある朝の点呼後、大隊長の話の中で、「我々は現在のこの苦しい生活の中で、みんなが力を合せ、この苦難を乗り越えて、帰る日まで頑張って行かなければならない……。そのために、みんなの中から大隊歌を募集したい。」と言って、全員の協力を求めた。私もかつて自己流の下手な自由詩などを作って楽しんだことがあったので、思い切ってこれに挑戦することにした。どうせ駄目だろうと思いつながら指定されたポストに投函した。

それからしばらく経ったある日、大隊長が一人で私の部屋に来て「大隊歌の応募に見事当選した。」その賞品だと言って大袋に入った煙草を置いていってくれた。丁度煙草が切れた時だったので、これを全員で分けて喫ったが、一同大喜びであった。その後、この歌詞は師範学校出だと言う鈴木候補生によって作曲され、作業の行き帰りに歌うようになったが、それはあまり長い期間ではなかった。

この歌について後日、私はひそかに考えさせられたことがあった。この歌詞は入ソ後まだ一年も経たないときに作ったので、少々軍国調のところもあったかも知れない。従ってこれが当時より一年も経過したころであったならば、例の民主グループ、アクチーフ等によって糾弾され、吊るし上げの対象になっていたかも知れない。でも嬉しかった思い出の一つ。

一、あゝ幾度か辛酸の 棘の道を踏み越えて
進みしこぞの草枕

あゝ 其の中に生れたる

団結、我等、内山隊

二、おゝ東天に陽は昇り 我等が前途導きて

祖国に続く道 拓く

おゝその中に生れたる 明朗我等 内山隊

三、あゝ 戦は敗れども

我等如何でか止むべしや

祖国の再建誓い合う 紅き血潮のその中に
たぎるはこれぞ大和魂

(当時この収容所は大陸の行動目標として
「団結」「明朗」が掲げられていた)

移動について

ソ連抑留中、一番いやだった事、と言ったら私はこの収容所の移動を挙げたい。

それは今まで一緒にいた戦友と別れ別れになることがほとんどであったからだろう。私の場合、在ソ三年余の間に七〇八回はあったと思うが、詳細は二〇三の収容所を除いてほとんど忘れてしまった。

以後はソ連よりの帰還後、原隊(初めて入隊した部隊)の戦友に聞いた話だが、彼らの部隊は移動がほとんど無かったのでお互い家族的な雰囲気と友情のもとに過ごすことが出来た由に聞き及んで心底羨ましい思いがした。私達の入ソ当時の大隊はほとんどが幹部候補生で占められていた関係とか? これをソ連当局は作業面だけでなく、政治面? でも勘案してその決定だった様にも思われた。

即ち入ソ当時の奈良大隊は各分隊までバラバラにして、約百人にしてこれをホルモリン地区の各収容所に送り込んだ。……と言うことではなかったろうか？ 従って移動の都度新しい組の編成がなされた。私は二〇四を出てからは二百台の収容所の記憶はほとんど無いから、恐らく三百台の収容所に移ったのではなからうか？ 三〇二、三〇五、三〇七、三〇八、三一七。これらの番号だけがすかすかに頭に残っている。

山井戸掘り

これは恐らく三〇七収容所辺りかと思うが、はつきりした記憶は無い。この辺一帯の線路の予定地はどこも立木が伐採され、取り除かれたただけどこまでもこぼこと山が続いていた。

その高い山の付近一帯に丁度井戸ぐらいの大きさの堅穴を掘り下げていく作業なのだが、二人一組となつて一つの穴を受け持ち、五メートルぐらいの間隔で、一場所十箇所から二十箇所に及ぶこともある。もちろん各組の受け持ち場所は抽選に

よつて決めて始まるのだが、その仕事のノルマが直に翌日の食料の支給に直結すると言う、いわゆる「働かざるもの食うべからず」とのソ連の大原則を盾にとつての捕虜いじめだった。我々は与えられた工具、即ち円匙、十字鋏、石のみ、バケツ等をもつて仕事を進めて行くのだが、各穴の条件はほとんど違うと言う事だ。従つて、円匙と十字鋏だけでどんどん掘っていける穴もまれにあったが、ほとんどの穴は堅い岩盤を、石のみとハンマーで少しずつ打砕いていかなければならない。其の上、水の出る穴に当たった場合は、この水のくみ揚げに時間をとられ到底ノルマを完遂することなど出来なかった。その結果支給された一例をあげると、一人一日当り一〇〇%のノルマ達成の人は一般基準量である黒パン三〇〇グラム、雑穀三五〇グラムの他、野菜、魚、塩等を大釜で煮とろかした水っぽいスープが缶詰の空缶に一杯、と言うことなのだが、これが基準量の八〇%しか出来なかった人には二〇%の減量、六〇%の人は四割減

量の支給と言うことになる。同時に一二〇%達成出来た人は二割増しの給食になるのだが、ほとんどまれであった。

この様にして彼らは我々に食べ物をちらつかせながら仕事の能率を上げようとしたのだが、その結果は全く逆であったと思う。のみならず我々はそのため、減食を強要されたため、日ごとに体力の低下を来し、次第に痩せていったのである。

この様な事実こそ、正に人權を無視した残虐行為として忘れられない。

凍傷

我々が入ソして一番驚いたのは予想外の寒さだった。北支に居るころは寒くても零下一〇度ぐらいであったので軍手一枚で何とか過ごせたが、ソ連に入ってから寒さはまた格別だ。十一月の十日ころ、既に零下二〇度ぐらいはあったであろうが、十二月に入ってから温度は日増に下り続け三〇度、四〇度は常温であったらしい。

私達はほとんどが夏衣に編上靴のいでたちで入

ソしたので特に感じたかも知れないが……。

間もなく防寒帽や冬衣、大手袋、防寒靴との交換があったので一応ホツとしたが、これはかつて関東軍の衣類を満州から取り上げてきたものだった。年改まって昭和二十一年一月になってからの気温の低下はまた格別であった。

作業中、お互い隣の人の鼻に注意し、鼻の先が透き通って見えたら、作業を止めて、手袋で少しづつ擦り、次第に血の巡りを良くして、凍傷を最小限に食い止める。と言う方法をとってきたが、それでもやがて春を迎えるころになると、鼻の先を真っ黒くした人が散見された。

次、これは私が恐らく三地区での出来事として記憶しているが、橋梁の基礎工事のため、真冬のコンクリートの打込作業をしていた時の事。

この作業場は分厚い二重の天幕で覆われ、ところどころにストーブを設け、コンクリートの凍結を防いでいたので中で的一般作業はさほど苦にはならなかったが、私はこの時水くみを引き受けて

いたので、履いていた靴がいつの間にか濡れてしまっていたのも気づかずにいたのが災難のもと：……。もちろん、水は外の雪を大きな釜の中に入れて薪をどんどん燃やしてお湯にして使っていた。いよいよ三交替の次の組が来たので、作業を申し送って収容所まで約三キロの雪道を歩き、やっとの思いで我が舎に戻り、防寒帽をとり防寒外套を脱ぎ、次に靴を脱いで寝台に上がってごろりと横になろうとしたのだが、その靴が抜けないのだ。考えてみると、作業現場でお湯くみの作業中、いつの間にか靴が濡れていたのを、そのまま雪道を歩いて来たため、すっかり凍結してしまったと言っ次第。

靴は隣の戦友に手伝ってもらって、やっとの思いで脱ぐことが出来たが、さて、その後が大変。よく見ると両足の指が真白になっているではないか。すは凍傷と言う事で、毛布で何回も何回も擦ったが親指だけは遂に元の状態に戻らず、凍傷の痛みに耐えなければならなかった。

帰還後、農業に従事、その間、自治会長を始め、農協、共済組合の役員及び小山市農業委員として四期十二年、檀徒総代等歴任。

【執筆者の紹介】

住 所 栃木県小山市大字武井

抑留地 コムソモリスク

労働 鉄道、伐採、道路工事

引揚時 昭和二十三年十二月一日

第一大拓丸船

引揚時の健康状態 栄養失調

健康状態良好

現 在 昭和五十七年三月二十日

全抑協栃木支部役員

平成十九年九月から全抑協

評議員

(栃木県 野沢 芳夫)